

「戦ひの人」としての透谷について

——「人生相渉論」を中心に——

真 嶋 恒 雄

序

明治二十五年（一八九二年）二月、「厭世詩家と女性」一作を掲げて颯爽と明治文学の一角に名乗りをあげた北村門太郎透谷は、それ以後わずかに二年有余の歳月を闊したまま、明治二十七年（一八九四年）五月十六日払暁、芝公園地第二十号四番の自宅陸上において満二十五年四ヶ月の短い生涯の幕を我と自らの手で降ろすにいたりました。透谷晩年の盟友島崎藤村は、この透谷のいたましい命運を哀惜、痛恨してその著書「飯倉だより」の中で「透谷が死んだ後でも書いた反古だの、日記だの、種々書き残した毛紙なぞを見る機会があつて、長い年月の間にあの友人のことを考へて見ると、掘つても掘つても尽きないやうな種々なものが後からくく出て来るやうに思はれた。」と述べております。また、「これほど私が透谷のことを忘れないといふのも、一つは自分の年の若く、心の柔らかな青年時代にあの友人と知合になつたからでもあり、一つはあの友人の書き遺したものを纏めて置かうと思ふほど深い縁故のあつたからでもあるが、就中、私がああ友人から感化を受けたことの深かつたか

らであろう。」とも記しています。

しかし、それでは、一体生前の透谷は若き島崎藤村にどのように深い「感化」を与え、どんなに深い影響を及ぼしたというのでありましようか。「掘つても掘つても尽きない種々なもの」とは、全体どのようなものであつたのでしょうか。藤村自身は私がさきにも引用しました「飯倉だより」の中で、この点についていくつかの注目すべき所論、たとえば、透谷が「何事も本質的に見て掛らう」とした人であつたとか、「戦ひの人」であつたとか、あるいはまた「*Prigone*な性質の人」であつた等という見解を展開しております。私はこのような言葉のはしほしの中に、藤村の透谷に対するなみなみならぬ理解と愛情の大きき、深きを感じするのであります。

けれども、今はそれらの一つ一つについて詳細に吟味するゆとりがありませんので、この小論を進めて行く便宜上、さきに藤村が論述しましたいくつかの問題の中から、「戦ひの人」としての透谷に焦点を定め、透谷がいかなるものを目指して「戦ひ」、何を敵として、どのように挑戦していったか——という観点から多小の考察

を進めてみたいと考えます。なお、この論を展開するにあたりまして、さきあげました藤村の「飯倉だより」の中の「北村透谷二十七日忌に」を重要な手がかりとしたことを、あらかじめおことわりしておきます。

本論

さて、島崎藤村は「北村透谷二十七日忌に」の最初の部分で、例の山路愛山との「人生相渉論争」に触れ、まずここに「戦ひの人」としての透谷の面目を窺おうとしたようであります。そして、藤村は、この論争において透谷自身が述べた最も大切な意味を持つ言葉の一つ、すなわち「大丈夫の一世に立つや必ず一の抱く所なくんばあらず。然れども抱くところのものは必ず見るべき功績を建立するにはあらず。建築家の役々として其の業に従ふや幾多の歳月を費して後、確かに巍手たる樓閣を起すの算あり。然れども人間の靈魂を建築せんとする技師に至りては、其の費すところの労力は直ちに有形の樓閣となりて、ニコライの高塔のごとく衆目を引くべきにあらず。」を引用して、透谷が「人生に相渉るとは何の謂ぞや」を著すことにより、愛山の思想を当面の敵とし、それに対して論戦を挑んだ理由を、「山陽のような事業家以外に、別に人間の靈魂を建築しようとする技師のあることを言ってみせて、世を益することもなく人世に相渉ることもないやちに見える文学に反つてより尊い事業のあることを弁明した」のであると説きました。このようにして山路愛山の思想に正面から敢然として駁論を展開した透谷の強い語調、激しい気魄に、藤村は深い感銘を覚え、透谷死後二十数年を経過して

いるにもかかわらず「戦ひの人」としての透谷の風貌を、改めて認識しなおすのであります。

しかし、透谷の本質をこのようにまず第一に愛山の思想への「戦ひの人」と論じた藤村の考えは、はたしてほんとうに正当なものであったのでしょうか。

むしろ、文章により、筆によってこの人の世に生きる意味をただ、「文章即ち事業なり。文士筆を揮ふ猶英雄劍を揮ふが如し。共に空を撃つが為にあらず。為す所あるが為也。萬の彈丸、千の劍芒、若し世を益せずんば空の空なるのみ。文章は事業なるが故に崇むべし。吾人が頼巽を論ずる即ち渠の事業を論ずる也。」（「頼巽を論ず」）と言いつつ山路愛山の世俗的な考え方、透谷が我慢ならなかった気持ちには私にも推察できます。文章を書く目的は「空を撃つ」ためではない。「世を益」するための「事業」として書くのだという愛山の実益主義的な文章観が、透谷の気持ちを大そう刺激したというその間の経緯は、私にも理解できます。事実、この点については、透谷自身が「人生相渉論」を世に問うてからわずか三ヵ月程後に記した「賤事業弁」の中で、「余は愛山君の「頼巽論」を批評したるにあらず、愛山君が頼巽を論ずるの標準として、及びすべての他の文士を論ずるの標準として、其の事業を取らんとするを、怪しむたるのみ。（中略）『頼巽論』の冒頭教行が面白からぬを以て、即ち事業を標準として文章を論ずるを非なりと思ひしが故に、彼の如くには論ぜしなれ。」と述べていることによつても明白であります。

けれども、ここでもう少し慎重に考えてみなければならぬことがあるように私には思われるのです。と申しますのは、さきに透谷が

愛山の論に挑戦した時に用いた、「事業」という言葉について改めて検討し直す必要があるように考えられるということであり、透谷は「事業」というものをどのように考えていたのでしょうか。今しばらく透谷の語る「事業」についての考えに注目してみたいと思います。

④「……極めて拙劣なる生涯の中に、尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に、尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は、見ることを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる俤に睨ましめて、真摯なる靈剣を空際に撃つ雄士は、人間が感謝を払はずして恩沢を蒙むる神の如し。天下斯の如き英雄あり。為す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ、自ら能く信じて、他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざるなり。」

⑤「愛山生が、文章即ち事業なりと宣言したるは善し。然れども文章と事業とを都会の家屋の如く、相接せしむるは不可なり。敢て不可といふ。何となれば、聖潔にして犯すべからざる文学の威厳は、「事業」といふ俗界の「神」に近づけられたるを以て損ずべければなり。……」

⑥「然れども文学は事業を目的とせざるなり、文学は人生に相渉ること、京山の写実主義ほどになるを必須とせざるなり。文学は敵を目標けて撃ちかゝること、山陽の勤王論の如くなるを必須とせざるなり……。」

以上、透谷の説く「事業」の意味をたしかめようとして煩を厭わず透谷自身の文章を辿ってみました。しかし、透谷の言う「事業」

の意味は依然して不明確で曖昧であります。この曖昧さ、不明確さはどこにその因があるのか。私はその第一の原因を、透谷の説く「文章」という言葉の概念が、愛山の用いた「文章」のそれとくいちがっている点にあると考えます。さきに示しました③の文章の冒頭によってもはっきり認識することができまますように、透谷は「文章」を創ることを「事業」と認めているわけです。けれども、透谷の言う「文章」はあくまでも「文学としての文章」であります。だから、もしここで透谷・愛山両者の「事業」という言葉の意味を明確にさせるとすれば、④「文学」としての「文章」を創ること、透谷のいう「事業」⑤「非文学」としての「文章」を作ること、愛山のいう「事業」というように区別するべきであろうと思います。もっと別な言葉で言いかえますと、透谷の考える「事業」とは、文章によってあくまでも人間の内面にかかわる世界、人間の靈魂を陶冶していこうとする「意志」あるいは「精神の構え」を指すのであり、愛山の言う「事業」は、世の人のための利益を考え、盲いたる世人の自覚を促し、民衆の蒙を啓くための「啓蒙的文筆活動」を指していると考えて差し支えないのではないかと思うのであります。このように「事業」という言葉の概念を規定すれば、透谷が文章を創る自身のことを「人間の靈魂を建築せんとする技師」と称した意味もはっきり理解できると思いますが、愛山が「文章即ち」「世を益せ」んとする「事業なり。」と言いつつ切った意味も明確に把握できると判断するわけでありませう。

およそ何かの問題で論争を戦わす場合には、論争する両者に共通の論争点がなければ成立しないということはますます事新しく述べらるまでもないことですが、透谷・愛山の論争はその意味で共通の論

点、共通の概念規定がその出発の当初から欠けていたと私は思わないわけには参りません。

さて、それならば一体、透谷はなぜこのような激しい口調の論陣を張って愛山に「戦ひ」を挑んでいく必要があったのであろうか。なるほどさきに例示しました藤村の熱意のこもった透谷擁護論や、透谷自身の「賤事業弁」あるいはまた「人生の意義」の文中において、透谷自らその理由について述べてはおります。しかし、愛山の「頼業を論ず」全体に対して真正面から取り組むことなしに、その最初の部分数行のためにどうしてこのような論戦を展開しなければならなかったのでありましょうか。もっと他に理由があったのではないか。このような疑問を私はここ数年抱いていたのでありますが、たまたま「座談会明治文学史」の中で柳田泉氏が語っている次のような言葉にぶつかったのであります。

「僕自身の考えだと、彼自身は大いにこういうことを誓かざるを得ない個人的な理由があったのだと思う。それはなぜであるかという、彼は例の十八年の大阪事件から逃げた、あのことがいつまでも負目になって、おれは敗北者だ、おれは事業から逃げたのだ、という意識がいつまでもつきまとっていてとれない。それを隠しているから、愛山がその方面で文学は事業だということは、これはおれに對して、おれのそこをついて、おれの弱いところを知りながら、ついできたんだというふうに感じたのじゃないか。(中略)愛山はそうは言わないけれども、透谷自身としては、非常に痛いところをつかれてるわけで、自分は事業から逃げたんだから、そういうことをいわれちゃかなわないというので、かっとなつて、ああいう激しい駁論を書いたのじゃないかという気がし

ます。」(一八八ページ)

むろん、これを説む人の中には、大へんうがら過ぎた見方だとられる人があるかも知れません。透谷に對してあまりにも酷な見方だと判定される意見が出てくるかも知れません。けれども、かつての透谷、少くとも明治十七年における透谷は、自身の生命をかけた「事業」として、「憐む可き東洋の衰運を恢復す可き一個の大政治家」となりて、己れの一身を苦しめ、萬民の爲めに大に計る所あらんと熱心に企て起し、「己れの身を宗教上のキリストの如くに政治上に尽力せんと」(「石坂ミナ宛書簡」六) 考えているのであります。ところが、翌十八年六月中旬頃、透谷はその政治上の友人であつた大矢正夫等から「大阪事件」に参加することを勧誘された時、「この時に至りて我は既に政界の醜状を悪くむの念漸く専らに」なつたため、「頭を剃つて」その「事業」に参加することを断りに行つていたのであります。(勝本清一郎編透谷年譜) しかも、このような透谷にとつて重大な挫折を経験しながらも、彼は「少しく元氣を恢復する」とまたまた「希くは私のヒューゴ其人の如く、政治上の運動を織々たる筆の力を以て」世人を「支配」啓蒙しようとするのであります。(前記石坂ミナ宛書簡) けれども、この企ても結局、その年(明治十八年)の暮には全く影を潜め、「生は全くアンビションの梯子より落ちて、是より氣楽なる生活を得たり」(前記) という無惨な結果に終つてしまふのです。

もちろん、透谷が「人生相渉論」を發表したのは一八九三年(明治二十六年)の二月のことですから、文章によつて「私のヒューゴの如く」啓蒙事業を實踐し始めようとした時期との間には、ほぼまる六年間の歲月のへだたりがあるということを、充分計算に入れな

ければならないと思います。しかしながら、透谷自身が、文章によって、「織々たる筆の力」によって政治上の啓蒙活動を果せようとした事実は、しかもそれが「頼襄・山陽」のように結実せずに、失敗に終わったという苦い透谷内面のしこりは、やはり払拭しようとしても払拭しえない痕跡となつて、いつまでも透谷の心のどこかに残つていたはずであります。従つて、柳田泉氏が指摘されるように、愛山の「頼襄を論ず」という文章の冒頭わずか敷衍にひっかかり「かつとなつて、ああいう激しい駁論を書いたのじゃないか。」という見解は、あの座談会における一時の思いつきの放言とは受け取りにくい。やはり透谷内面の急所を射抜いていると思うのであります。

結

このように考えて参りますと、透谷の「戦ひ」には、この小論の最初で引用しました藤村のような熱心な弁護があつたにしても、自己の感情に激し、性急に自身の主張を貫き通そうとする無理な「精神の構え」があつたように思われるのであります。もしほんとうに本氣になつて、愛山の思想にむかつて「戦ひ」を進めていくのであれば、自身の感情や自己の内面にわだかまる古い心の傷跡を、より鋭くより冷静に見つめ続けるべきであつたと思います。愛山の思想と戦うのもよろしい。しかし、それよりも以前にもっと沈着な態度で、まず透谷は透谷自身との「戦ひ」を続けるべきではなかつたのかと思わずにはいられません。このことが、透谷の内面で着実に行なわれていたならば、彼の用いる言葉の一つ一つはもっと美しい光芒を放つたことであらうでしょうし、もっと読む人の心を捉えたにち

がないと思われるのであります。

以上、沈滞、混迷を続けていた明治中期の文学の世界にあって、彗星のように束の間の光輝を放ちつつ消え去つていった透谷に対して、この私の考えは甚だ当を失したものであるかも知りません。また、「『戦ひの人』としての透谷」という題目を設定しておきながら、わずかに愛山との論争についてだけを取りあげて、他の面における透谷の「戦ひ」に全く触れえなかつたことも心残りではあります。けれども、未完成のままにこの世を去つていった一人の文学者の一断面を把握しようとした一つのささやかな試論として受け取つていただければ幸いです。

(完)

(滋賀県立大津商業高等学校教諭)